

大学進学希望者に対する進路相談について

—本校における進路相談の事例—

農業科 高柳 真人

1. はじめに

本校では、創立以来の職業学科体制を改変し、平成6年度より総合学科を設置した。総合学科とは「普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科」（文部省、1993）であり、その教育の特色の一つとして「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること」を挙げている。更に、「このため、在学中に自己の進路への自覚を深めさせる動機となるような科目を開設するとともに、生徒の科目選択に対する助言や就職希望者・進学希望者の双方を視野に入れた進路指導などのガイダンス機能を充実すること」が挙げられている。

本稿では、ここにも挙げられた「将来の職業選択を視野に入れた」進路指導について、とりわけ大学進学希望者を対象とした進路相談の進め方について、本校での指導事例をもとに検討を加えながら報告するものである。

文部省（1983）は進路相談について、「進路指導の中に含まれる諸活動の一つである」が「進路指導のハイライトは進路相談にあるのが通説である」という解説を行っている。多様な個性や適性、進路希望を持った生徒に対する効果的な進路指導を実施することを考えた場合、個別指導に重点を置く進路相談がその一つの重要な要素になってきているといつてよいであろう。

生徒の中には、高等学校卒業後、すぐに就職する者もいれば、進学をする者もいる。しかし、進学をする生徒も卒業後は就職することになる。また、進学する上級学校の専攻も、職業との関係が深い場合が少なくない。従って、すぐに就職する生徒ばかりでなく、進学を考えている生徒にとっても、自分の「将来の職業選択を視野に入れ」ておくことが重要になってくるといえよう。また、別の見方をすれば、人は、職業という社会的な役割を通して、具体的な自己実現のイメージを掴んだり、語りやすいということができるとはいえないかと考えられる。すなわち、「将来どんな人になりたいか」と青年期以前の人に問うてみれば、多くの場合、保育さんになりたいとか、大工さんになりたい、プロスポーツ選手になりたい、政治家になりたいなどといった具体的な職業を通して将来の自己像を語るのではないかとと思われる。「将来

の職業選択を視野に入れた」進路指導の重要性は、このような点にも示されていると思われる。もちろん、将来の職業選択を「視野に入れる」というのであるから、具体的なある特定の職業にまで絞れなくても、ある職業分野というようなことでも構わないと思われるが。

ところで、従来の進路指導はややもすると、生徒の合格可能性に目がいきがちになり、生徒が何を学びたいかということ十分に吟味させるよりも、先ずは生徒に受験学力を身につけさせることに力点が置かれてきたように思われる。文部省の寺脇（1999）も、「今でも大半の進路指導は誤った方向にあると思います。ほとんどの高校では、とりあえず学力を向上させようという地点からスタートするわけじゃないですか。それで、その結果に依じて進学か就職か、あるいはどの程度の大学に進むべきかを指導する。でも、大事なものは、将来何をしたいのか、どんな仕事に就きたいかですよ。だから、まずはそのことをじっくり生徒に考えさせるべきなんですよ」と述べている通りである。とはいえ、現実的に、入学試験への準備や、大学入学後の学業面での適応準備ということを考えれば、少なくとも基礎学力の充実を図るための指導が必要なことは論をまたないであろう。その点については、本稿ではふれないが、本校でも、総合学科に移行後、いくつかの新しい全校的な取り組みを行っている。

しかし今日では、「将来の職業選択を視野に入れた」進路指導の重要性が段々と認識されつつあるように思われる。例えば、進学の指導についても、全国高等学校進路指導協議会（1998）の『大学ガイダンスノート』には「多くの人はいずれ学校を卒業して、何らかの職業に就きます。それで生活をささえると同時に、仕事を通して社会とかかわったり、様々な人と出会ったりします。大学進学は、大学で学ぶことや取り組むことだけに主眼をおいて進学することもできますが、将来、君が進む職業分野とも大きく関係するだけに、ここでは職業や仕事について視野をひろげていきます」という記述が見られる通りである。いずれにせよ、進路相談に応じる教師の側にも、進学指導に当たっては、生徒の「職業選択を視野に入れた」指導を心掛けることには十分な意義が認められるといえよう。加勇田（1998）は、「面接では教師も

生徒と一緒に揺れることを求められる。それが生徒の進路意識を深めることになるからである」と述べているが、教師の意向の押しつけでない相談は重要であろう。と同時に、相談にあたる以上、教師にはある自律した態度が求められるが、将来のライフプランを踏まえて進学について考えるという枠組みを提示することは、自分の将来を考えながら揺らぐ生徒に、一つの指針を提供することになろう。

2. 進路相談について

進路相談の進め方を検討する前に、進路相談の特徴について述べておきたい。上地(1999a)は、学校カウンセリングの相談内容を、「学業相談(学業不振・学習意欲喪失など)と進路相談(進学・就職など)および適応相談(不登校・いじめ・非行・神経症など)の三つの領域に大別される」と述べるとともに、学業と進路に関する相談を「どちらかと言えば予防的・開発的カウンセリング」であるとしている。この説明が示すように、進路相談は、カウンセリングの一領域として考えることができる。また、カウンセリングをその内容や特性から、「情緒的レベルでの受容や共感をベースにした専門的な援助関係…を通して…相手の変容に役立とうとするかわり方」(小泉、1990)である治療的カウンセリングと「問題を持ち始めた児童・生徒の早期発見・早期援助により問題発生を予防するはたらきかけを行うこと、およびすべての児童・生徒が望ましい方向に発達・成長していけるように援助することを目的とする」(沢宮、1999)予防的・開発的カウンセリングの2つがあるとする考え方がなされてきている(例えば、国分1979、上地1999b)。このうち、進路相談は、全生徒を対象にしたキャリア発達という発達課題の達成をめざした開発的なカウンセリングであるということができよう。カウンセリングは、行動変容をめざしているといえようが、治療的カウンセリングが、症状を「消去」する側面を持つのにに対し、進路相談などの開発的なカウンセリングでは、むしろ、進路探索行動や自己探索行動を「生起」させる側面を有しているということができよう。このような視点に立ちつつ行われる進路相談の進め方について、相談事例をもとに検討してみたい。

3. 進路相談の事例

ひとつの進路相談事例をもとに、本校で行われている

進路相談の実際を提示しながら、進路相談の進め方を検討していく。

(事例) 適性・興味を理解している生徒の学部選び

(1) 生徒の概要

語学に興味があり、得意な生徒。アメリカなど外国の文化に対する関心が強い。具体的に、どの大学、学部に進んだらよいのか迷っているとのことで高校3年の7月に来談した。本人との面談により、受験(進路先、受験システム等)に対する情報不足による不安、自分の受験学力についての不安があることがわかった。但し、本人はトップレベルの成績で入学し、入学後の成績も良好であり、受験勉強にも取り組んでいた。将来は、得意な英語を生かして国際交流の仕事に就きたいという意識を持っていたが、英語はコミュニケーションの手段として学びたいのであり、英語そのものを学びたい訳ではないことが分かった。家族の意向は、本人の希望を尊重していること、学校の進路指導の方針に協力したいと考えていることが確認された。

先に述べたように、将来、英語を生かして国際的な場で働きたいという希望を持っていたが、具体的に、何学部を受験するか決めかねていた。既に7月になっており、受験のための対策を立てて対応していくためにも、受験大学や学部について早急に検討することが必要であると思われた。本校の進路指導の経過の中では、保護者を交えた3者面談も終了し、多くの生徒が具体的な進路を決定し、具体的な受験対策に取り組んでいたからである。

本人には、希望する大学進学が叶うのかといった不安があった。また、自分の希望をかなえることのできる学校がどこなのかははっきりしてこないという気持ちの未整理といった葛藤があるように思われた。

(2) 本人に対する見立てと援助の方針

この生徒との面接を通して、以下のような見立てを行った。

①大学受験に関する情報不足に基づく不安がある

②自分の受験したい学部・学科が決まっていない

そこで、以下のような、本人に対する教育援助の基本的な方針を立てた。

①大学や学部に関する情報の提供

②本人の学力を確認する機会の設定

③具体的受験対策の実施

④進路相談の実施

(3) 具体的な計画

先に述べたような見立てと援助方針にもとづいて、以下のような具体的な援助計画を立てた。

①本人の進学に関する援助については、進路指導部と担任、副担任を中心とした年次会（いわゆる学年会を本校では年次会と呼ぶ。以下同じ）と協力した援助チームで行うこととした。進学相談や進路情報の提供は、主として進学係が行い、当該生徒の日常の観察を行ったり、面接や小論文の指導、学習状況の確認や督励といった具体的な受験対策については、担任を中心とする年次会が主として担当する。毎週行われる学年と進路指導部の連絡会議をはじめとして、両者で密に情報を交換し合い、本人が受験校、学部を決定し、受験対策が軌道に乗るまで、チーム構成員間で指導方針を点検、検討しながら関わっていくこととした。勿論、こうした指導は、この生徒に対してのみ行われるのではなく、基本的には、他の生徒に対しても、一人一人にきめ細かく関わっていくの本校の進路指導の進め方の特徴である。

②本人が円滑に進路決定に向かって行けるよう、援助チームを構成する年次会構成員に対しては、受験学部を決定することを焦るよりも、まずは、本人が本当にやりたいことをはっきりさせることがむしろ問題解決の近道であり、今後の頑張りにつながることを他の指導事例等を挙げて説明した。但し、当該生徒と日常よく接している年次会の教員は、有力な援助資源であり、支持的な関わりや、具体的な受験対策のバックアップをして欲しいということを要請した。

一方、本人に対しては、進路情報の提供を含めた進路相談を行うことにした。受験に対する不安の軽減を図るため、推薦入試制度をはじめとする入試制度や、受験までの流れ等に関する情報を提供した。また、学部の選択に関しては、将来の職業を考える過程で、受験したい学部の検討が行われると考えられ、複数大学、学部のシラバスを始めとする学部内容や進路先についての情報を提供するとともに、進路面接で、何度もやりとりをする中で、自分の本当にやってみたいことを気づかせることをめざした関わりを行った。また、自分の目で実際の大学生活のイメージを持てるように、送付されてくる資料だけでなく大学説明会の情報を提供し参加を勧めたり、公開模擬試験の受験を勧め、自分の受験学力についても検討させることにした。

（4）進路相談の概要

時期的には重なるところもあるが、概ね、以下のような経過で当該生徒に対する教育援助がなされた。

①第1期（受験に対する不安の軽減）〔7月初旬〕

7月はじめの来談当初は、時期的に、校内外を含めた

他の受験生に相当遅れをとっているのではないかと、今からでは受験に間に合わないのではないかと、どこを受験したらいいか迷っているといったことを訴えていた。そこで、第1期としては、焦りにつながる必要以上の不安を軽減することを考えた。

受験対策の遅れに関する不安については、現在、かなりの大学で行われている推薦入試制度やセンター試験を利用した入試制度などを説明し、基礎学力、目的意識など様々な尺度が進学の資料として利用されていることを資料を提示しながら説明した。

また、相談に来た時、自分自身が何を勉強したいのか考えたり、気持ちを整理することをできるだけ手伝う旨を伝えた。この支持的な対応にこの生徒は、ほっと一安心したようであった。

②第2期（進学先の情報獲得と受験学部の検討）

〔7月初旬～8月〕

夏休みが迫ってきており、各大学から資料が送られてきたり、体験入学、学校説明会が開催される時期になった。生徒には、進路指導室の進学に関する資料の閲覧を勧めたり、体験入学への参加を勧めた。興味・関心を持った何校かの見学に参加したところ、この生徒は、第一志望校としたい大学を見つけることができた。総合大学であるその大学の様々な学部の説明を聞く中で、アメリカの文化と日本の文化や異文化コミュニケーションについて学べる比較文化系、異文化体験や世界の教育について学べる教育系の学部に関心を持ったそうである。国際交流に関わる仕事に就きたいという希望を持っていた生徒であったが、どのようなスタンスでそのような職業に携わるかということが、進学先の学部で学べることの理解が深まるにつれ具体化してきたように思われた。

③第3期（進学したい学部の決定）〔7月～9月〕

こうした進路先の情報収集と並んで、本人が漠然と求めている国際交流に関する職業に就きたいという希望をより具体化し、その希望を実現できる学部選びを行うための進路相談が行われた。

この生徒は、英語の学習体験などから、高校に入学した時から外国の社会や文化に興味があり、国際的な場で活躍できる職業に就きたいと考えていた。そのため、英語などの学習に力を入れてきた。最初の頃の面接で、英語はコミュニケーションの手段として身に付けたいのであって、英語そのものを勉強したいわけではないということがはっきりしてきた。

次いで、英語を使うにせよ、どんな勉強がしたいのかを対話していく中で、本人は、それまでの経験から、ア

メリカ人と日本人の考え方が違うことや、そうした違いがどこからくるのかに興味があるので比較文化系学部を受験したいという意思表示をした。そうした勉強をするのならその学部は向いていると思うと、その選択を支持した。

こうして受験学部が決定したようにみえたが、何日かするとまたわからなくなったといって相談に来た。そういう文化の違いを研究することにも興味あるけれども、実際に、日本人が外国に行って、外国人とコミュニケーションをとったり、異文化と接した時の適応の問題とかの方がよりびったりするようだというのである。そこで、異文化コミュニケーションとか異文化適応をどのような角度で捉えるかによって、比較文化的なアプローチ（例えば、現象研究）も教育・心理学的なアプローチ（例えば、適応の援助、異文化カウンセリング）も可能だといった情報提示を行ったところ、また、考えてくるとのことだった。学部の授業内容だけでなく、学部・学科の性格、学問的アプローチの仕方についても調べるとよいというアドバイスを行った。

その後、この生徒は、何回も進路指導室に顔を出し、自分が本当に将来職業としてやってみたいこと、大学で学びたいことを、対話を繰り返しながら確認していった。多い時は、午前中の休み時間毎にやって来て、将来、どのような立場、視点から国際交流に貢献したいかを話していった。その結果、最終的には、国際機関等に就職し、子供の国際理解教育を進めたり、自身も希望している留学等の異文化体験を援助する仕事をしてみたいという確かな気持ちがあることを確認し、教育系学部への進学を決定した。考え抜いた末の決断であったためか、迷いが吹切れた感じで、あとは、受験に向けて頑張るだけと言っていた。

④第4期（受験に向けての具体的対策の実施）

〔7月～11月〕

第1希望の大学の推薦試験を受けることになった。一般受験のための対策も進めさせながら、面接や小論文の練習を通して、進路先の世界についての学習、具体的な職業についての学習を深める機会を数多く設けた。この時は、担任をはじめとする年次会に属する教員など、多くの教員の協力を得ながら、当該生徒は、具体的な課題を次々とこなしていった。

こうした努力の甲斐あってか、この生徒は、推薦入試でも臆することなく実力を発揮し、めでたく希望する大学の教育系学部合格した。

尚、この生徒は、大学入学後もときどき高校を来訪し、

入学した学部で意欲的に学習している様子などを報告にきている。

4. おわりに

この相談事例を振り返ってみると、来談した生徒は、基本的には自分の興味や適性のある程度把握しており、また、自分でよく考えることのできる生徒であった。従って、私がしたことは、必要と思われる情報を提供することと、この生徒が話したいことを素直に聞いて支持したり、話を聞いていてよく分からないところやはっきりしないところを聞き返すこと、また、担任を始めとする年次会構成教員からなる援助チームのコーディネートといったことであった。全般的に、前回の面接を振り返りながら次回に臨む姿勢を続けることができたので、本人がいろいろと思っていることを表出させ、段々と整理していくことにつながったと思われる。特に、進路相談のような、ある行動を生起させる開発的カウンセリングにおいては、情報提供が重要な役割を果たすといわれるが、この事例でも、進路先に関する情報提供が役に立ったと思われる。また、「将来の職業選択を視野に入れ」た自己理解が進んだことも、本人にとって幸いであったということができよう。また、このことが促進されるに際しては、援助チームの働きかけが効果的であったと考えられる。教師は言うまでもなく教育の専門家であるが、それぞれの持ち味を持った、個性的な専門家である。学習指導についても基礎的なところから専門的なところまで、また、やる気を育てるにも、激励を得意とする者や支持的な者、待てる者など、様々なタイプがある。この生徒に対して、複数の目が注がれ、それぞれの持ち味を生かした働きかけがなされたことは、想像に難くない。このことも、この生徒の進路決定行動に、有効に働いたと考えられる。

この事例にも示されたように、ある程度、自分の進みたい方向がわかっているものの、絞りきれないという場合に、将来就いてみたい職業をイメージして考えるというアドバイスが有効なことがある。例えばこの他にも、「環境の勉強をしたいけれども…」という相談を受けることがある。現在、環境に関する勉強のできる学部・学科は農学系、工学系を始めとして、家政系、法学系、経済系、保健系、芸術系などたくさんあり、どの学部に進んでもアプローチの仕方やテーマによっては、学習が可能のように思われる。従って、生徒としても、どこに進んで行けばよいかわからないことも十分考えられる。そのよう

な時、一つには、その学部・学科のアプローチの仕方を調べることも一つの方法になろうし、或いは、卒業後就きたい仕事から考えてみるということも有効なことが少なくない。すなわち、公園や緑地環境を造成していきいたいとか、行政の中で環境を保全する政策を実行したいとか、環境に負荷を与える有害物質を分解させる技術を開発したいなどといったことから、進路先を考えるということである。

進路指導は、単なる就職斡旋や学校紹介を行うことではなく、「生徒自らの在り方生き方の指導・援助」（文部省、1995）であるといわれている。「君はこう生きるのが正しい」という解答がないだけに、指導の難しさを感じさせられる分野でもある。高校時代は、とにかく大学に進学するための学力を身につけるための勉強をして、その先のことは大学に入ってからゆっくり考えればいいのではないかという考え方もある。そうした考え方を全く否定するつもりはないが、高校時代に、自分が将来やってみたい職業について考える機会を用意することが重要な指導・援助になってきていると言ってもよいであろう。

J. L. ホランド(1990)が、その職業選択理論の中で、職業の選択とはパーソナリティーの表現であると述べているとおり、将来の職業選択を踏まえた進路先の検討を続けることは、自分のことを理解するいい機会となる。また、このことは、社会と関わりながら、自分のキャリアについて、また、自己実現について、ある程度長期的な視野のなかで現実的に考えていくことの具体的な手がかりを与えると考えられるのである。

平成6年より、高等学校に、普通科、専門学科と並ぶ第3の学科として総合学科が開設されるようになった。進路指導を重視するこの学科が生まれてきた背景には、それまでの進路指導が、生徒に生き方を考えさせる機会を十分用意できなかったことがあったといわれている。先に述べたように、就職を希望する者はもちろんのこと、進学する者にとっても、将来の自分の職業を考えることが重要である。その職業に就くにはどのようなコースがあるのかを検討し、進学することがそのコースに適しているならば進学すればよいという考え方は、進路探索の一つの道筋を示す。また、その職業を選択する過程の中に、本人の適性や興味・関心を吟味することが含まれていることになる。但し、現実には、多くの高校生にこうした考えに基づく指導が効果的かといえ、現時点では判断が難しい。但し、本稿で取り上げた生徒については、高校入学時より、将来の職業の方向性が見えていたという点で、こうした理念に基づく進路指導が適合すると考

えられた。

事例で取り上げた生徒の場合には、相談的な面接を何度も行いうことで、外国や国際的に活躍する仕事がしたいという希望の根本にある自分の気持ちや、自分にとっての進学の意味を確かめることができたといえよう。そして、その経験を自分一人のものにすることなく、職業という世界を通じて他者と共有しようとする際の自分の位置を確認できたことで、学部選択という形で表された進路選択が可能になったと思われる。

今後も、生徒にとって役に立つ進路指導の方策を検討していきたく考えている。特に、一人一人の生徒の個性を生かし、自己実現を援助することに対応できる進路相談の進め方について研究を続けていきたいと考えている。

引用・参考文献

- ホランド, J. L. 1990 『職業選択の理論』(渡辺三枝子・松本純平・館岡夫訳) 雇用問題研究会
加勇田修士 1998 「生徒とともに揺れる進路指導」
国分康孝(編集代表)・中野良顕・加勇田修士・吉田隆江編『育てるカウンセリングが学級を返る[高等学校編]』図書文化 p.66
小泉英二 1990 「治療的カウンセリング」 国分康孝編『カウンセリング辞典』誠信書房 p.392
国分康孝 1979 『カウンセリングの技法』誠信書房 p.7
文部省 1983 『中学校・高等学校進路指導の手引き—高等学校ホームルーム担任編—(改訂版)』日本進路指導協会 付録 参考資料・実践例等 p.37
文部省 1993 『「産業社会と人間」指導資料』ぎょうせい p.5-6
文部省 1995 『中学校・高等学校進路指導の手引き—教育課程編—(改訂版)』日本進路指導協会 P.5
沢宮容子 1999 「開発的カウンセリング」 前田基成・沢宮容子・庄司一子 『生徒指導と学校カウンセリングの心理学』 p.49
寺脇 研 1999 「危機意識を持って取り組まないと教師の存在意義が危うくなる」 リクルート 「キャリアガイダンス」 第31巻第2号 p.21
上地安昭 1999 「治療的カウンセリング」 国分康孝編集『学校カウンセリング』日本評論社 a:P.122, b:p.117
全国高等学校進路指導協議会 1998 『大学ガイダンスノート』実務教育出版 p.18